

小豆小僧古書店

フルーツサンド子爵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは思い付いたけど作者の技量が無いため、書くのを諦めたモノを置いてある所です

目次

幼女戦記

- もしも幼女戦記にひみつ道具を持つて
いった男がいたら ————— 1
- もしも幼女戦記にひみつ道具を持つて
いった男がいたら〜2〜 ————— 8
- この素晴らしい世界に祝福を！
このマトモな転生者に安息を！ ————— 14
- このマトモな転生者に安息を！〜その
————— 19

幼女戦記

もしも幼女戦記にひみつ道具を持っていった男がいたら

「あれ？ 転生するんじゃないのか」

「申し訳ありませんが少しお待ちください」

俺は○○○○、朝起きた後トースターに入れた食パンをかじったとき知らない所にいて、知らない美女が目の前にいた

この美女が話した事を纏めると……

- ・この美女は神
- ・自分より下の神が人間を転生させているのを見た
- ・その神が面白いことしてるのはズルい
- ・だからダーツに当たった人間を転生させよう！

中々に理不尽だ！ 流石に人間なら分かるけど、神がそうするはないのではと言ったら……人間は神を模したものの、だから神だってそうなのはおかしくはないと言われたか

ら何にも言えなかった。そのまま転生特典を上げると言われたから、どんな世界に送られるのかと聞いたら……その神が転生させた世界だから知らないときつきと同じような感じで言われた

そうなったら何を持っていくか……何て考える必要はなく、勿論ドラえもののひみつ道具を特典に転生したはずだったんだが……

「あの……天使みたいなの？ 俺なんでここにいるの」

「そのですね……貴方が貰ったチカラはあの世界では凄すぎるため、我々の神がさつき貴方が見た我々の神よりも上位の神にお願いしに行っているの……それ待ちです」

「なるほど……まあそうなるか。ひみつ道具だもんなくあれ？ 何このバイブ音みたいな」

「あつすみません……はいもしもし、はい……あつそうですか！ なるほど分かりました。はい、失礼します。えつとで「ちよつと待つて！ えつ携帯持つてんの」はい、天使は皆持つてますよ？ あつイメージ不是吗ね、神なら念話で連絡がくるのですが……我々天使はそういうのが出来ないので携帯電話を使って連絡してます。いや、人間って便利な物作るのので楽ができますよ」

「あつうん……そうなんだくへえく」

想像してほしい……全身金属鎧で羽の生えた天使が携帯電話で連絡をとっている姿を。シユールすぎるだろう！ 知りたくなかった、もつとファンタジーなやり方だと思つてたら現実的だったからね！ よく見たら最新機種じゃねえか、わざわざ買に行つてんのかよ

「それですね……ほとんどのひみつ道具を使用禁止となりますが、そのかわり残ったひみつ道具を強化する事になりました。その確認は転生してからお願いします……本当なら我々の神がここに来る予定でしたが、精神的に疲れてしまったらしく来れないとのことなのですみません」

「あつはい……分かりま、えっ？ こんな急に送ら……」



どうもハビエル・グティエレスです。無事転生しました……そこそこ良い家です。くど育ったのはいいけれど問題がそこそこある。まずはこの国は今のところ関係ないが戦争が起こっていること、帝国とレガドニア協商連合、帝国とフランソワ共和国……元いた世界というならドイツとノルウェー、ドイツとフランスが戦争している。因みに俺の産まれた国はイスパニア王国つまりはスペイン……記憶が確かなら第二次世界大戦のドイツとかを援護していた気がするけど、この世界ではそんな事はしていないらしい

そして問題というよりか驚いた事は魔法があることだ。魔法といっても炎を出したりとか出来ないが存在し、それを扱える人間を魔術師と呼ぶ。しかし近代の科学により優位に立てるものではないからルーシー連邦もといロシアでは過去の遺物扱いになっているらしい……が実際のところ演算宝珠と呼ばれる基本兵装があればどんな状況でも

運用出来るから便利だと言われる。単独兵科から着弾観測、空戦から医療分野など

ルーシー連邦が過去の遺物扱いなのが意味がわからない！ さっき言った空戦は飛行補助装置ありきの話で国によって形状が違う……あと演算宝珠も国によって性能差と特徴差があるが一個あたり最新の戦車並みの値段だ、高い！

そもそも何でこんな事を知っているかという……色んな事があつたんだ。祖父が持っていたラジオを買い替える事になったから貰って……改造した。天才ヘルメットと技術手袋を使ったら凄いのが出来た、調子にのって使っていたら祖父が来て誉めてくれた、誉めてくれたまでは良かった……良かったんだ

「ドクトール、ドクトール何処におられるのですか！」

「ここにいますよ……何ですか、そんなに呼んで？」

「ドクトール……前に頼まれたと思いますが航空魔導師用の補助装置は完成しましたか？」

「……あああれですか、あれならそこに置いてますから持ってい「一緒に来てください、説明は私では出来ませんので」……はあ、分かりました。少し待ってください」

そう何故か兵站総監部に入れられた……しかも新型演算宝珠を作れと言われ、周りの

大人から同情の眼差しが見え、モチベーションは最悪だった。仕方なく天才ヘルメットと技術手袋で今ある演算宝珠より上質なのを作った……今思えばそれが馬鹿な行動だった

それが原因で兵站総監部から新設された部所、ハビエル自由製作部などという頭の悪い部所に送られた。メンバーは俺一人、しかし様々な依頼が舞い込んでくる……最近ではフランソワ共和国が戦争がどうなるか分からなくなつたから新しい演算宝珠を作つてほしいと軍のトップ自ら頼まれたので作つた。この時にはある程度自重しないで作るようになり、作つたのは宝珠核が3つの演算宝珠……今までは2つだったのを増やしてやった！ これは他の国では出来ていない革新的な演算宝珠……ついでに量産型も作つたから文句は言われなかった

現在はまだハビエル自由製作部という名前だが近々新しい名前がつくらしい……是非とも普通の名前になってほしいと思う

「ああドクトール！ 持ちますので早く来てください、皆様が首を長くして待っていますので」

「分かった、分かったから……こないたいけな少年を働かせるなんて、まったくヒドイ

「国だ」

「ドクトール……戦場ではラインの悪魔と呼ばれる少女が活躍しているらしいですよ。だからマシな方です、それにドクトール」

「こつちを見てどうしました？」

「そんな凄い笑顔になれる子供はいませんよ」

もしも幼女戦記にひみつ道具を持っていった男がいたら

〜2〜

「ドクトール反応はどうでしたか？」

「……いや良かったですよ。あとは順次作って夜戦の基本装備としていくことになりましたので」

「そうですか、それは良かったのですが……なぜそんなしかめっ面なのですか？」

確かに新しい補助装備である暗視ゴーグルの評価は良かった。この国では航空魔導師を夜戦に使うという未来的な発想で俺に頼んできた……俺じゃなくても頼める所があるだろうと丁寧な言葉で言ったら、そういう未来的な物は俺に頼めと言ってきたらしい。まあそれが俺の仕事でもあるから作ったのは作った……しかしこの国は発想が未来過ぎやしないか？ どの国も航空魔導師を夜戦に使うなんて発想ないし、というか夜戦という概念がないような世界……いや帝国なら考えてる奴はいそうだな、あそこ戦争バカだし

いやそんな話が出ているんじゃない！ 問題はそのあとだ、補助装備の話が終わったから帰ろうとしたら次の話が始まった。その話は元はといえば俺がポロつと漏らしてしまった話を何故か本当にやってしまった軍部もとい政府がやってしまった事だ………それは見た目美しい働く女性の写真集と様々なタイプの男性の写真集を売るという事。何がおかしいかって殆ど一般人な所だ！ 俺が子供が将来どんな職業に就きたいか考えさせる事もできて、大人には美しい女性や様々なタイプの男性を見る事が出来るから売れるんじゃないやねって漏らしたからって本当に作るバカがいるか!! 軍部はそれで格好いい男性や綺麗な女性の軍人の写真を出してたら大人になった子供が入ってくる可能性がある、政府は回りの国に如何に自分の国が平和で未来があるか知らしめる事ができる………という理由でOKしたらしいけどな、そんなに上手くいったまるか！

「前に売った写真集が恐ろしいほど売れたらしい……それも他国にも売れたらしいから第2弾を作ることになったという報告だ。しかもそれに出ることになりました」

「あくドクトール、そういうの苦手でおられますしね。それでお断りになったの「断れる」と思ってるんですか！」無理ですね」

そう何故か俺が写真集に出ることになった！ ふざけんなよと言いたくなくなったが相手は上司、そんな事いつてタダでは済まないのは分かっているからOKするしかなかった。良かったと思える点は何時を通りの格好が良いという事だけだ……着飾ったキラキラの子供服を着ると言われたら涙を流しながら撮影することになりそうだ

「あつここで失礼します……少し疲れましたのでゆっくり休みたいので」

「確かにドクトールはお疲れになったことでしょう……仕事も一段落した事ですしゆっくりお休みになられてください」

「……お気遣いありがとうございます」

俺専用の部屋、ハビエル自由製作部に入ってようやくゆっくりできる……紅茶を用意して、自作した冷蔵庫から俺が作ったショートケーキを出して優雅な時間を

「つて何で特殊部隊アルコイリスの隊長ロベルタさんがいるんですか？ 勝手に紅茶注いでるし」

「ふふ、そんなに他人行儀にしなくてもいいじゃないかハービー。それよりそのお菓子を分けてくれないかな、私も食べたいんだけど」

「……ロベルタさん良いんですか？ 貴女一応航空魔導師のネームド達を集めた部隊の隊長ですよ。そんな人が俺の部屋に来……おい勝手にケーキ切り分けて食べるな！」

「んぐっこれは美味しいなハービー、商品化してほしいくらい……これは？」

勝手に紅茶とケーキを優雅に飲み食いしているストロベリーブロンドの美女、軍服の一部がそれぞれ違う原色になっているネームド部隊の隊長、それがロベルタさん。何故か俺によくしてくれて笑顔をよく浮かべる人であり人の話を聞かない……訓練の時は冷たい目で怖い。昔一部の軍人が反旗を翻したとき問答無用で軍服の赤い染みに変え、血に染められたストロベリーブロンドの髪から苺髪というやつた事とあっていない異名がつけられた女魔導師……本当に何でよくしてくれるのかわからない

そのロベルタさんが手に取ったのは俺が書いた落書き、他の国なら本当に落書きとして処分されるような物なんだが

「それは潜水魔導師の構想ですよ……まあ提出するつもりはないですけどね。あとケーキ食べ過ぎです、俺の分残してください」

「なら速く食べたらい、これが美味しいのが悪い……私は悪くない。潜水魔導師か……」

提出したら即OK出しそうだからだな。それにしてもよくこんな物を考え付く、アイデアとしては恐らく何処の国も考え付かないものだ」

「だからですよ……それに人員割くくらいなら軍は他の方に回すで「しかし考え付いた時点で理由があるのだろう？」まあそれなりには」

「ぜひとも聞きたいな……あとハービーの皿の上のケーキ貫つても「駄目です」中々厳しいな」

勿論理由はある……前の世界では船同士の間は縮小、替わりに空母やミサイルを撃ち落とす為のイージス艦などが出てきた。さらに水中では潜水艦が船を沈没させたり、潜水艦を海の藻屑にしたりしていた……しかしこの世界では潜水艦はあるが空母はない、戦闘機はいつも陸から飛び立つて陸にいる敵を殺している。航空魔導師は海にいる船を倒すために態々行くことはない、となれば船の敵は潜水艦……となるはずだがそうではない。何故か潜水艦の相手は潜水艦、船の相手は船というおかしい事になっている……勿論相手に潜水艦がいなければ船を狙うが、そんな世界だ……そこで思い付くのが水中で戦う魔導師

「船を沈める方法などいくらでもあります……が飛行適性のない魔導師を陸で使い潰す

くらいなら、海で船を沈めた方が良いと思いますし。あと船の砲台は下には向きませんから、例えば兵士が撃つてきてもこっちは水中なので当たりません……安全な場所で安心して船を沈める事ができるといふ利点はあります」

「……なるほどそういう考えもあるのか。私的にはいくらでもある方法の方が知りたいが……そろそろ時間のようだ。ハービー、ケーキ美味しかった……また食べに来るぞ皆でな」

「それは止めてください……俺死んじゃうじゃないですか、働きすぎで!!」

「ふふ……今でも働きすぎだと思いがな」

この素晴らしい世界に祝福を!

このマトモな転生者に安息を!

「……………さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました」

「……………はあそうですか」

「そうですかつて貴女ね、私女神よ……………そんな態度ないんじゃない? 地獄に落としてもいいの「すみません……………記憶がないので、地獄に落ちるような事したなら仕方な」待って、お願いだからそれは止めて! 今月のノルマが厳しいの、このままじゃ私怒られちゃうの!」

ノルマって何なんだろうか? 神様もサラリーマンのような感じだとしたら天国も大変そうだ……………のんびりするんじゃないやなくてデスクワークさせられたりしそうだし。まあ地獄よりかマシなのは分かっているけれど

「アナタが考えてる事分かるから教えてあげるけど、天国は何もないからお爺ちゃんみたいに向ぼっこするしかないのよ……………けれどね今なら異世界に行くことが出きるの

よ！ 今だけ、そう今だけ期間限定のサービスのよ」

「……すみません、とつても胡散臭いです女神様」

「う、胡散臭いって何よ！ 私は女神よ、女神に胡散臭いって何よ。敬つてよ、もつと敬つて私を讃えてよ！」

「……………何かその異世界に問題があるんじゃないですか？ 魔王がいるとか、僕の他に送った人が問題を起こしてるとか」

「こんなに胡散臭いんだ、きつと何か問題があるはず……世界が荒廃してるとか、人間が滅亡寸前とか。そうでもないかと普通に生まれ変わらせるはずだ、それくらいじゃないと異世界に人を送ることなんてしないはず……問題があるから送るんだろう」

「えつとね……魔王軍のせいでそこそこピンチなの、それをどうにかするために異世界に人を送ってるのよ」

「で送った人がまだ魔王を倒せてない……もしくは魔王軍にいると」

「……はいその通りです。魔王倒すために何か一つ持っていていけるんだけど……それを使つて魔王軍の為に働いたり、グータラしたり、自分の欲望に従つたり……で、でもちゃんと戦ってる子もいるのよ！ 魔王にすらたどり着いてないけど」

「……………駄目じゃないですか。もしかしてノルマって異世界に送る人間の数ですか？

はつきり言いますけどね、送りやいいってわ「言わないでよ！ 私だってね分かってるわよ、でもノルマ達成しなきゃ怒られるの…お菓子とか没収されるの！ だからお願い、異世界に行つてよ…行つてノルマ達成させてよ！」

「……み、みじめだこの女神。分かりました、分かったからしがみつかないでくださいって何涙と鼻水拭いてるんですかこの駄女神！」

「あつ駄女神つて言った！ 駄女神つて……私は駄女神じゃないわ水の女神アクア様よ、アナタが行く世界の女神なの……謝つてよ、速くあ「やっぱり天国行き」待つて謝るから待つて〜お願い異世界に行つてよ〜」

本当にこれが女神なんだろうか？ この泣きながら鼻水を垂らしている水色の髪の毛の残念な女性が女神なんだろうか……あとこれが女神の異世界つてそれだけで大丈夫か？

「分かりました、行きますから……行きますから鼻水拭かないでください！」

「グスツ本当に行つてくれるのね……これカタログだから選んで「それ以外からでも良いんですよね？」まあ別にいいけど……無茶苦茶強いのは無理よ、それできるならとつくの昔にやつてるから」

「アクア様って水の女神なんですよね？　水関連の凄い女神なんですよね……その世界で凄い女神様なんですよね？」

「そ、そうよ凄い女神なの！　私はその世界の二つある宗教の内の一つ……アクシズ教の女神なのよ、凄いでしょ！」

「それなら……水と氷の魔法の適性と威力を上げる事くらいできますよね？　それを持って行きたいんですが」

「えっそれくらいでいいの？　それくらいなら別に構わないけど……はいアナタにあげたわ！　じゃあその魔方陣からでないでね……フリじゃないわよ」

「……分かってますよアクア様、あとありがとうございます」

「それじゃあ……さん。アナタをこれから異世界へと送ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として……魔王を倒した暁には神々から贈り物を授けましょう」

「えっ何かくれるんですか？」

「そう、世界を救った偉業に見合った贈り物……例えばどんな願いでも、たった一つだけ叶えてあげましょう」

「……それあるのに魔王倒せてないってどんだけ魔王の手下強いんですか」

「さあ勇者よ！　願わくは数多くの勇者候補の中から、アナタが魔王を打ち倒すことを祈……あつ魔方陣間違えた」

「えっ? 聞き間違えじゃなかったら魔方阵間違えたって聞こえたんですけど、気のせいですよね!」

「だ、大丈夫よ! 死ぬ訳じゃないから……ちよつと出す魔方阵間違えただけだから大丈夫よ。まあ頑張つて私の評価あげてね!」

「最後の余計な言葉なかったら、ちよつとは許せたんですけどね……次あつたとき絶対に怒りますからね!」

「ぶーくすくす! 次会うときはアナタが死んだときか、魔王倒したときだから……あつたとしたらずつと後よ」

あの駄女神絶対に覚えおけよ……次会つたらデコピンじゃすまないからな! あつ体が浮く……つていうか吸い込まれていくんだけど大丈夫なのこれ!

このマトモな転生者に安息を！〜その2

汚水の駄女神アクア様……僕は異世界転生しました。あなたが魔法陣を間違ったために、一から人生を始めた事は良しとしましょう……何故ならあなたがまさか言葉を理解させないまま転生させるという愚行をしたので、逆に一からじゃないと大変な事になったことでしょうか

僕は紅魔族という魔法に特化した一族の元に産まれました。魔法に特化したのはいのですが……色々と残念です。まずネーミングセンスはありません、僕の名前はひえびたという酷い名前とした時は絶望しかけました……両親の名前がすんすんとかくるとんと知って、一周回って受け入れましたから。あと厨二病です、紅魔族は黒髪紅目が一般的な中僕は白髪蒼目という正反対な子供として産まれました……普通なら他の子と違うとか言ったりするものだと思うのですが

「この子は……俺はお前達とは違うとかを普通に言えるとは、何て羨ましいんだー！」
「違いますよアナタ……俺こそが完成体、紅魔族の王となる者だ！　ですよ」

と頭の痛い事を言っていました。周りの大人も普通に羨ましがりながら可愛がってくれたので良かったです……でもみんな厨二病です。そんな大人と子供に囲まれてすくすくと育ち、今アクセルの街という駆け出し冒険者街で暮らしています……が何で異世界から来たっぽい高校生とベトベトになっていて幼馴染みのめぐみんと一緒にベトベトになって歩いてるんですかアクア様？

「めぐみん……何でベトベトになってるの？」

「その声はひえびた、ひえびたじゃないですか。この男に見捨てられて蛙に食べられたんですよ！」

「おおーいい言い方！ お前が魔法使っていていきなり倒れて食われただけじゃねえか、誤解を生むような事言うんじゃないよ!!」

「生臭い……生臭いよおつてアナタだれ？ めぐみんの友達か何かだったら大衆浴場に入るお金ちようイタツ何するのよカズマ！」

「お前はタカるな！ 蛙に殴りかかって食べられたなんて知ったらお前が笑われるだろう！」

「あーカズマが言った！ そもそも私は女神よ、女神の拳が蛙ごときに効かないなんておかしいじゃない」

「……めぐみん、お金あげるから風呂に入ってきたら」

「……ありがとうございます。じゃあカズマまた後で」

「依怙鼻肩よ、依怙鼻肩！ めぐみんにだけ渡すなんて……ねえカズマ？ 私もお風呂入りたいんですけど」

「なにもしてないお前は水でもかけ「うわーん、カズマに変態プレイを続行し」よーし分かった！ 分かったからそれ以上何も喋るな……ほら金やるからさっさと行けよこの穀潰しが」

「め、めぐみーん、カジユマがいじめてくるー！」

このカズマっていう人は何であの駄女神と爆裂馬鹿のめぐみんと一緒にいたのだろう？ めぐみんの爆裂馬鹿はパーティー組んでから初めて知ったとしたら理解できるんだけど……本当になんで汚水の駄女神アクア様と一緒にいたんだろう？

「……色々と大変そうですね」

「大変どころじゃないけどな！ アクアは役に立たないし、めぐみんは爆裂魔法しか使えないしよ、チクシヨーー!!」